4.2. 企画と準備（１９９８年３月－１９９９年１月）

日本人職員会のパーティ会場で日本アート展示会の企画を耳にし、「書」での参加を申し入れたのは１９９８年３月４日だった。国連ビル IAEA 棟の一階で良く催されるアートクラブの企画に応募しようと言うのだった。瞬間的に「書友、布村麗泉さん」に声をかけることを思いついた。「何れは」と思っていた「書」の手習いを始める決心を１０年ほど前に与えてくれた人だ。以来、一年か二年に一度会う程度の仲だった。だから、遠く離れた地でのことでもあるし協力してもらえる勝算があるわけではもちろんなかった。参加協力を依頼の手紙の文を練って、投函したのが 8 日朝、ハイキングにでかけるウィーン西駅でだった。「春休みあけの頃電話でご意向を伺います」と末尾に書いた。

「春休みあけ頃」と言うのは、その一ヵ月後に一時帰国を予定していたからだ。諾否何れにしろ、判断するのに多少の日時の余裕を見たつもりだった。が、その帰国前に「『書展』の計画に惹かれています」との前向きの連絡が入り、急に現実的になってきた。日本でそれ以上の相談をする機会はなかったが、自分用に条福用の紙を買い増して帰墺した。ウィーンに戻って５月末、展示会の日程が翌年２月と決まった。構想、制作、表装、広報等本番までの八ヶ月の大まかなスケジュールが見えてきた。

７月始め、布村麗泉への正式の招待状を投函して山に向かった。ウィーンに来て以来三年越しの目標にしていたオーストリア最高峰グロスグロックナー（３７９７m）である。久しぶりの雪山であり、今までにない高さだった。富士山より高い。氷河の上である。年始めから体力作りはしていたが、正直言って不安だった。遭難の可能性も考えた。が、この山からは何としても帰ってきたかった。ガイドの助けを借りて７月６日無事登頂を果たした（登頂記）。オーストリアでの私生活での最大目標を達成した思いだった。その感動を味わいながら８月は作品制作に時間を割いた。「絵」の玉谿さんも新作に取り組んでいると耳に入ってきた。

日本の麗泉からは「題材構想中」とか「試作中」とか、時に便りが届いたが、私には創作の力量はない。寺子屋時代の作品や、手元の指導書を見ながら気に入った字を臨書していた。試作品を寺子屋時代の先生に送って朱を入れてもらった。結局私の作品は六点、麗泉の作品と合わせて一覧を本章末尾に掲げる。自分の作品の中から、幾つかの思い出を書いておきたい。

- 「日新月新又年新」創作。ウィーンに来た頃からか座右銘になっていた。「日々に、月月に、そして年毎に新たな気持ちで」と、自分自身に「過去よりは将来を」見る気持ちを保ち続けたい願いからである。原典は「日新日新又日新」（大学）。試作品を師に送ったら、「新」が三字あるので書き方に変化を、と手本をくれた。自分ではもっとも気に入った作品になった。
- 「東海の小島の磯の白砂に吾泣きぬれてかにと戯る」創作。以前から好きな詩だった。草行入り混じりの他、「戯る」と当て字をしたり遊び心で書いた。師に勧められて「茶室掛け」の表装にしてもらった。私には珍しく挿し絵が入ったが、砂浜に印したそのかにの足跡は這う方向によって一方だけにあるべきなのに左右に伸びている。題を与えるならさしずめ「右往左往」かと苦笑している。
- 「露」臨書。法語。これは添削なしのぶっつけ作品。二、三枚書いただけ。実は、秋口に表装を依頼するために最終作品を麗泉に郵送する朝、「日本書画三人展」の掲示用横書き条福を書いた後、墨が残ったからと半紙に気楽に書いたあとで荷物に入れる気になった。皮肉にも、展示会場で購入希望が出た私の唯一の作品がこれだった。

- 「福如雲」臨書。原詩は昭徳皇后。日本を離れる時に、職場の仲間が歓送会で贈ってくれた色紙を手本に条福を書いた。色紙を手配してくれた友人も達筆家だったが、その彼の友人の書との話だった。詩の意味がその頃の自分の気持ちに重なっていたので、うまく書きたかった。が、繰り返すほどうまく行かなかった。邪念がブレーキとなる好例の意味で、今も自省対象である。

その８月来墺の家内に指摘されて耳下腺腫瘍との診断を医者から貰う破目になった。９月始め、手術のため入院。その入院当日に届いた彼女からの手紙で、「実演」の提案があった。当初から内心考えてはいたが、作品が完成した後に相談するつもりでいた。入院の十日間、この実演の方法などを考えて過ごした。会場での華やかな彼女の姿が瞼に浮かぶようで術後の病院生活に潤いを与えてくれた。作品の表装も彼女が引き受けてくれた。１０月１９日、その表装のために自分の作品を彼女に郵送して一区切り。それからは公報活動と本番中の計画作りに入った。公報活動はちらし作り、職場誌への投稿、トーストマスターズクラブでのスピーチである。ちらしはドイツ語版も作った。日本語版はカラー印刷ができない環境だったので、ちょうどその頃一時帰国した友人の岡部氏に頼んで、日本で印刷し届けてもらった。暮れから正月にかけて日本に帰り、オープニングの進め方や、作品の搬送時期等最終的に相談した。会場の見取りや展示スペースは事前に手紙で連絡してあったが、書と絵、二人の書の配置案など細かいことは幾つも残っていた。オープニングでの実演方法については、手持ちの畳と座卓を持ち込むことも入院中に考えていたが、相談した上で通常の机を使うことになった。作品は梱包済みだったが、表装後の、自分の作品の写真を見て「馬子にも衣装」とはこのことかと悦に入った。立派に見えた。

帰墺直前に上野の「現代臨書展（１９９９）」に出掛けた。麗泉が毎年出品する書展である。多くの作品を前に、写真でしかまだ見ていない自分の作品が瞼にちらつき、ウィーンでの展示会場の様子が想像できたりで静かな感動を受けていた。ウィーンには留守中に届いた作品が空港止めになっていた。大きな木箱が自宅に届いた。１月２９日（金)、国連外部からオープニングに来てくれる予定のハイキング仲間やスピーチクラブの友人、日本人学校からの来場予定者の名簿を警備室に届けた。１月３０日（土)、

寒い日だったが快晴だった。作品を搬入し、架台の配置、懸架用の鎖等展示の準備をして布村麗泉夫妻を空港に出迎えた。少々遅かったが、会場に立ち寄りイメージを高めてもらってからホテルに向かった。翌１月３１日（日)。朝、ウィーン少年合唱団を聴いてから作品展示のため会場へ行った。前日、ある程度準備をしてはあったものの結局一日近く要した。この日も快晴で、作品が強い陽射しで変色するのではないかと心配になるほどだった。絵画部門の白山玉谿も夫妻で展示を完了した。あとは翌日のオープニングを待つだけだった。